

考えられるようにするための有効な手立てとなっていた。

② 役割演技を活用した自分との関わりの中で考えられる話し合い活動

- 葛藤が生じる小鳥の二つの自我を推定して即興的な役割演技をさせることにより、児童は、自分自身の考え方を問われることになり、自分のこれまでの体験に基づいたやり取りとなっていた。



- 役割交代をすることにより、一人の子どもが異なった立場で役割演技を行うことができ、自分と異なる立場や思い、多様な感じ方、考え方に会うことで他者理解・価値理解を深めることができた。

- 役割演技の際、観衆となる児童に演技を見る視点を明確に示したことにより、演技をしている児童だけでなく、全員が参加している役割演技となっていた。また、演技後、観衆の児童と演技している児童が話し合うことで、価値理解・他者理解・人間理解を深めることができた。

③ 自分ごととして考えられる振り返り活動

- 「親切にできなかったこと」を振り返らせることで、単なる道徳的価値の大切さを理解させるだけでなく、人間理解や他者理解も視野に入れた学習としていた。このことにより、児童が現在の自分自身に目を向け、道徳的価値観を深めることにつながっていた。
- 「親切にしてもらってうれしかった」という1年生からの手紙を読むことで、自己肯定感や実践への意欲の高まりを育むことができていた。また、相手意識をもたせることができた。

6 研究の成果および課題

(1) 研究の成果

- 道徳の時間における伝え合う活動を様々な視点から取り組んだり工夫したりすることで、児童一人一人が自らの思いや考えをしっかりともち、それを友達に伝えたり、友達の考えを聞きながら自らの考えを振り返ったりして、自らの思いや考えを深めたり高めたりすることができた。
- 一人2授業の実践に取り組み、子どもの姿を基にしたブロック部会での授業研究会を重ねて検討することで、子どもの姿をしっかりと見取り、道徳の時間の改善や工夫につなげることができた。
- 道徳教育全体計画の別葉を職員室内に掲示し、実践したことを明確にして改善や修正を図ったことで、学校全体の教育活動と関連付けて道徳の時間を考えることができた。また、道徳の授業を通して学んだ価値と結び付けて日常での指導に生かしたり子どもを称賛したりすることができた。

(2) 今後の課題

- 子どもたちが自分ごととして考えられるよう、自ら考え振り返る場を工夫したり、予想される児童の反応と発問を結び付け、補足発問を準備したりする必要がある。
- 友達の考えを基に、自らの考えを述べたり伝えたりすることまでには至らなかった。思いや考えたことを伝え合える話し合い活動の内容や視点を工夫したり、場の位置付けを考えたりしながら授業構想をする必要がある。

7 参照できるホームページ

<http://www.isesaki-school.ed.jp/nawasyo/> (伊勢崎市立名和小学校)

○研究の概要（富岡市立南中学校の取組）

1 学校教育全体で行う道徳教育の推進

- 本校生徒の実態から、一層伸ばしたい道徳性として、「向上心・個性の伸長」「思いやり・感謝」「よりよい学校生活・集団生活の充実」「生命の尊さ」を重点指導内容項目とし、全体計画の中に位置付けて実施した。
- 道徳の年間指導計画を、教科等学校教育活動全体との関連を図りながら見直すとともに、全体計画の別葉を作成し、これを活用して「補充」「深化」「統合」のいずれかに位置づけた道徳の指導案のもと授業を行った。
- 授業で学習した内容を日常生活の中で振り返り、日常的な自覚につながるように、各学年の道徳の授業で行った内容や生徒の感想等をまとめたものを廊下壁面に掲示した。また、授業で使った読み物等の資料と生徒の書いたワークシートをそれぞれ別々のファイルに綴じて保管することで、授業の内容や生徒の内面の変容を見取り、評価への活用を図った。

2 授業改善（思いや考えを伝え合う指導方法の工夫）

- 要請訪問や講師を招いた月1回程度の公開授業及び全職員による研究授業において、指導案の形式を統一し指導観（価値観・生徒観・資料観）を明確にした授業を行った。
- 「ねらい」→「中心発問」→「中心発問に導く発問」の順に授業構成を考え、価値を焦点化し、資料の内容に沿った価値の追求を通して理解を深めることを共通理解した上で実践に臨むこととした。
- 中心となる授業の形態が「教師の発問→生徒の発言」の繰り返しの形式から、「生徒の発言→生徒の発言」と形式を工夫し、生徒相互の伝え合う場への移行に努めた。
- 授業の中で生徒が互いの思いや考えを伝え合うための手立てとして、学級全体、グループ・ペアでの話し合い、カード等による意思表示の視覚化、座席の形態等の様々な工夫を指導案に明示して、授業を行った。
- 研究授業と研究会で話し合われた改善点等を「研修だより」にまとめて全員で共有化を図り、以後の道徳授業に生かすことで「伝え合う」活動の質的向上を図った。

3 家庭との連携

- 本校独自に毎月19日を家庭における「道徳の日」と定め、その日に合わせて道徳通信「Myハート通信」を発行した。その中で、日々の実践を紹介するとともに、毎月テーマを決めてそれに関する資料を「私たちの道徳」等から選んで提供し、親子で話題にする機会を設定し、道徳的意識の向上を図った。
- 学校と家庭が連携して道徳教育を推進していく道標を記した指標を共有化するため、本校の道徳教育の重点項目を中心にまとめた啓発リーフレットを保護者に配布した。
- 保護者対象の道徳教育に関するアンケートを年2回実施し、学校で行う道徳教育への理解を深めてもらうとともに、その結果をもとに家庭と連携した指導を行うための資料とした。

4 研究の成果

- 講師を招いての基礎研修と日々の授業実践、授業研究会の積み重ねにより、教師の授業構想力、伝え合う活動の工夫等の質的な向上が見られた。その結果、生徒が道徳授業に主体的、意欲的に取り組む姿が見られるようになってきた。
- 「伝え合う活動」を、道徳だけでなく教科の指導においても積極的に取り入れることで、生徒の発言への抵抗感が減り、自分の思いを少しずつ他人に伝えられる場面が増えてきている。同時に生徒の道徳的価値への関心の高まりも感じられ、学校全体に落ち着きが増してきた。
- 保護者に本校の道徳教育の取組に関する情報を積極的に伝えたり、授業を参観する機会を設定したりすることにより、保護者の道徳教育への関心と期待の高まりが見られ、授業や使った資料などについて家庭でも話題となる機会が増えた。さらに親子のコミュニケーションや、学校と家庭の信頼関係をより一層深めることにつながっている。

富岡市立南中学校の研究内容

1 学校の概要

学校名	所在地	電話番号	生徒数
とみおかしりつみなみちゅうがっこう 富岡市立南中学校	富岡市中高瀬1118番地	0274-64-1603	337人

2 研究課題 多様な価値観を尊重し、よりよい生き方を追求する生徒の育成 —思いや考えを伝え合う指導方法の工夫—

3 研究課題の設定理由

本校は、市の中央を東西に流れる鍬川の南に位置し、周囲は田園に囲まれ自然が豊かで、学習環境に恵まれた地域にある。「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力を持ち、心豊かでたくましい生徒の育成」の学校教育目標のもと、日々の教育に当たっている。また、本校では、道徳教育と関連付け、平成10年度から自問教育に取り組んでいる。現在は、「朝読書」「ノーチャイム・ノー号令」「自問清掃」を自問活動の柱とし、生徒会活動と連携して「我慢の心・思いやりの心・気付きの心・感謝の心・正直な心」の五心を醸成している。

本校の生徒は、明るく素直な生徒が多く、生徒会を中心にして「日本一の学校南中」を合言葉に学校生活に意欲的に取り組んでいる。一方で、自分の意志や考えを他者に積極的に伝えることが苦手な生徒や、困難な課題に対し自ら解決策を考え克服しようとする強い意志が身に付いていない生徒もいる。また生徒同士の人間関係については、全体的には良好といえるが、些細なことが原因でトラブルに発展することが多いのも事実である。これは相手の考えや個性を受け入れたり、話し合いによりお互いを理解し合ったりして、うまく折り合いをつけて解決することが苦手なことが原因として考えられる。生徒の人間関係づくりと豊かな人間性の育成は、本校の大きな課題の一つである。

また、道徳性検査の結果から見ると、本校の生徒はほとんどの項目で全国平均並みか上回っているかのいずれかであり、全体として望ましい傾向にある。その中で「一番望ましい評価」の割合が比較的低かった項目として、「節度」(1年生)、「向上心」「自然愛、畏敬の念」(2年生)、「理想の実現」「個性伸長」「健全な異性観」「自然愛」(3年生)が挙げられる。この結果をもとに各学年ごとに課題を明確にした上で日々の教育活動に当たることで、より一層の道徳性の向上が期待できる。

このような実態から、生徒が自他のよさを互いに認め合い、よりよい人間関係を築く能力を身に付けることが、これからの自分の人生を切り開き、よりよい人生を歩んでいくために欠かせないと考えた。そこで、効果的な資料提示や発問の工夫に加えて、互いの思いや考えを伝え合う指導方法を工夫するなど、道徳の時間の指導を改善・充実させていく取組を推進することにより、よりよく道徳的実践力の育成を図ることができると考え、本主題を設定した。

4 研究の概要

(1) 研究のねらい

生徒の実態や発達の段階を踏まえ、道徳の時間における資料提示のしかたや発問構成を工夫し、生徒が互いの思いや考えを伝え合う中で、思考を深め、価値を自覚できるような指導の改善を図ることを通して、互いの良さを認め合い、よりよい生き方についての自覚を深めた生徒を育成する。

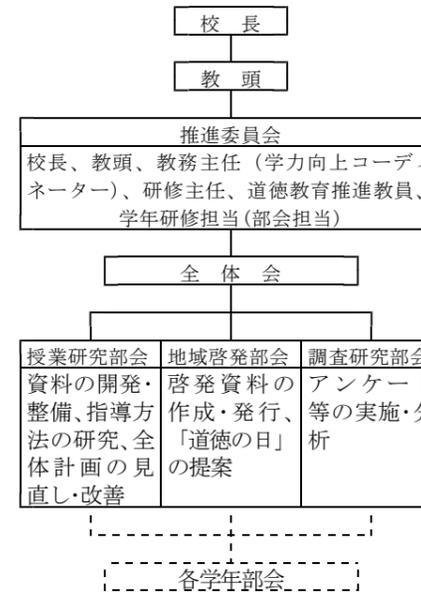
(写真左から順に)

指導案の検討会
道徳教育講演会
2年研究授業



(2) 研究の組織及び研究の経緯

① 研究の組織

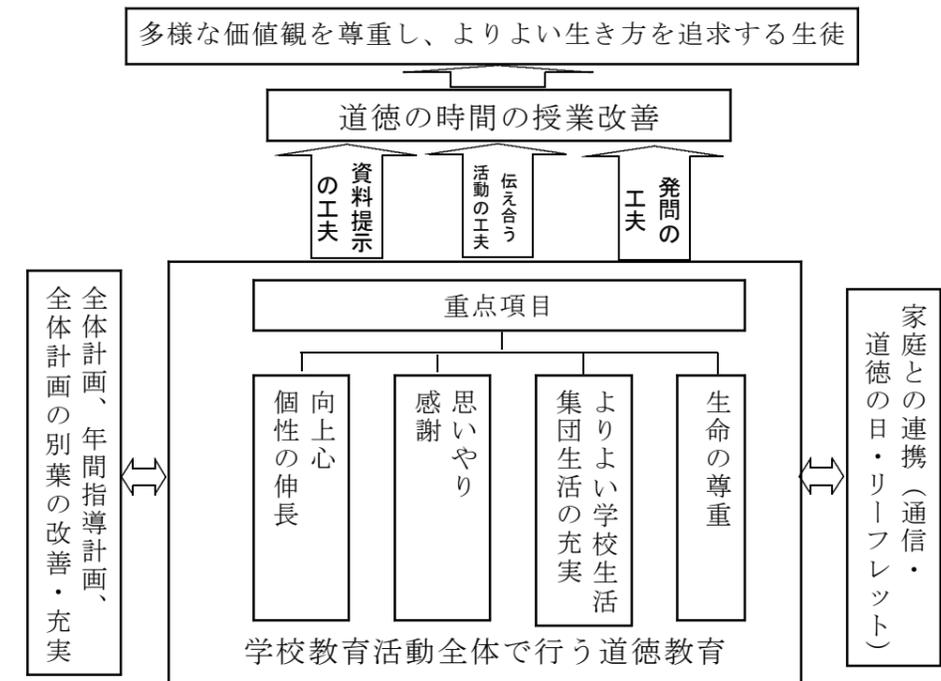


② 研究の経緯

月日	回	主な研修内容
4. 3	①	研究主題、道徳の指導計画、授業について
4. 20	②	研修の全体計画、道徳授業について
5. 25	③	研究の組織、要請訪問指導案検討
6. 15	④	第1回要請訪問道徳授業研究会（3年）
6. 22	⑤	道徳教育指導者養成研修伝達、一人1授業計画作成
6. 24		先進校視察（高山村立高山中学校）
7. 23	⑥	先進校視察の報告
8. 10		道徳授業パワーアップセミナー参加（東京学芸大学）
夏季休業		全体計画別業①（行事との関連表）作成 全体計画別業②（教科、特活等との関連表）作成
8. 25	⑦	パワーアップセミナーの報告
8. 31	⑧	道徳教育講演会（文科省教科調査官澤田浩一先生）
9. 7	⑨	道徳授業の進め方についての共通理解
10. 13	⑩	研究授業指導案検討
10. 19	⑪	2学年研究授業、講師による講話①
10. 19		関東ブロック中学校道徳教育研究大会参加
11. 16	⑫	第2回要請訪問道徳授業研究会（1年）
11. 30	⑬	3学年研究授業、講師による講話②
12. 7	⑭	研究授業指導案検討
12. 14	⑮	1学年研究授業、講師による講話③
12. 25		「道徳教育指導実践事例集」原稿の作成検討（推進委員会）
1. 18	⑯	要請訪問指導案検討
1. 25	⑰	第3回要請訪問道徳授業研究会（2年）

(3) 研究の内容

① 研究の全体構想図



② 基本的な考え方

ア 「多様な価値観を尊重する」とは

ここでいう「価値観」とは、いわゆる道徳の内容項目における「価値」の違いを指すものではなく、一つの道徳的価値に対する捉え方や感じ方の違いを指すものである。具体的には、授業中他人の考えや意見を聴いて自分との違いを知り、そこで否定したり対立したりするのではなく、違いを認め受け入れることを意味している。

イ 「伝え合う」とは

本研究における「伝え合う」とは、課題に対する自分の考えをペアや小グループ、あるいは全体場で「語る」のが基本であるが、それ以外にも、人の意見を聞いて頷いたり、カードに自分の立場を書いて示したりするようなことも含まれる。人の発言に対して必ず自分の考えをもつこと、そしてそれを積極的に人に伝えようとするを大切に、価値への理解をより深めていこうとするものである。

③ 年間指導計画の整備と資料の選定

年度当初に作成した計画に基づき道徳の授業を行うが、使う資料はねらいに対してより効果的な資料などと差し替えて実践し、その都度計画を修正しながら、生徒や学校の実態に即した年間指導計画の改善に取り組んだ。

④ 指導案作成のポイント

- 全体計画や年間指導計画の別葉などを参考にして、本時の授業がねらいとする内容項目における「補充」「深化」「統合」のいずれであるかを明記した。
 - 「価値観」「生徒観」「資料観」を明確にした上で、授業展開を考えた。
 - 「ねらい」には、「中心となる活動」「ねらいとする道徳的価値」「養うべき道徳性の様相」の3つの要素を必ず入れて簡潔に記述することとした。
 - 「ねらい」により迫るための「中心発問」をまず考え、その中心発問に導くための「基本発問」を決めていく。その際、それぞれの発問が独立して存在するのではなく、相互に関連し合っただけの必然的な流れになるように配慮することとした。
 - 「伝え合う活動」を指導案の中に明確に位置づけ、その際にできるだけ多様な意見が出るよう「発問」「意見交換」「話し合いの形態」「共有の仕方」等の手立てを工夫し記述することとした。
- ### ⑤ 学習したことを生かすための取組
- 学年ごとに実施した授業の「テーマ」「資料の概要」「生徒の書いたコメント」等を一枚のラシヤ紙にまとめて廊下の壁面に掲示し、生徒が学習したことを振り返ることで日常的な価値の自覚を促した。



2年「勤労の意義」

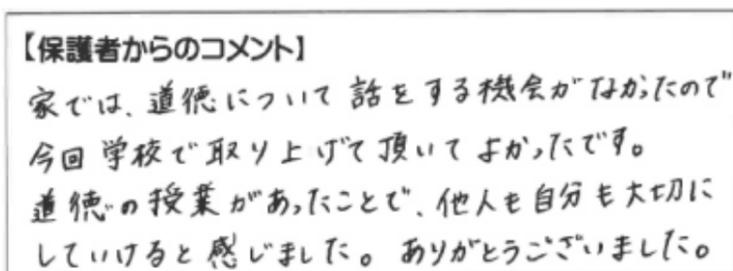


1年「私の反抗期」



⑥ 学校教育全体で取り組む道徳教育（人権教育との関連）

- 2学期の人権集中学習では、校長によるスライドを使った人権講話に始まり、人権映画の視聴、人権関連の題材を使った道徳授業（1年「家族への敬愛」、2年「相手の立場を考える」、3年「真の思いやり」）、生徒会を中心とした生徒一人一人による人権宣言等を行い、これらの学習を個々に「人権学習のしおり」にまとめた。また、その中に保護者からのコメントの欄を設け、道徳的な価値の共有を図った。



人権宣言

⑦ 家庭との連携

- 家庭への啓発を目的とした道徳教育啓発リーフレットを作成し、全家庭に配布した。また、本校独自に毎月19日を家庭における「道徳の日」と定め、「Myハート通信」を発行した。その中で、日々の実践を紹介するとともに、毎月テーマを決めてそれに関する資料を「私たちの道徳」等から選んで提供し、親子で話題にする機会を設定することで、道徳的意識の向上を図った。



リーフレット（表）



リーフレット（裏）



道徳通信「Myハート通信」

5 授業実践事例

(1) 「道徳的判断力を育てる伝え合う活動の工夫」（第3学年）

① 生徒の実態

道徳性検査の結果から「規則尊重」の生徒の行動や道徳的価値観の傾向については、ほぼ全国と同じような傾向である。しかし、「きまりや規則を守っているがその意義まで理解できる」という項目は全国よりも低い値を示しており、価値理解が十分に行われていない。決まりやルールは、周囲の迷惑にならないため、さらには自分たちを命の危険から守るためにあるという大きな意義を理解し、よりよい社会を作っていくための道徳的判断力を育てたい。

② 授業者の思い

動物園で働くことを生きがいに感じていた元さんが自ら辞めた理由を考えさせることを通して、決まりを守ることの大切さを理解させ、確実に義務を果たすことで、よりよい社会を作ろうとする道徳的な判断力を身に付けさせたい。

③ 指導のポイント

- 中心発問の1つ前の発問において、母親からの手紙を読んだときの、自分の判断に対する元さんの思いを話し合う活動を行うことで、元さんの様々な思いに気づけるようにし、中心発問の価値理解へとつなげていく。
- 自分の判断に対する元さんの思いを、「良い」から「良くない」の5段階の数直線に表し、その理由とともに話し合う。机の上に意思表示プレートを提示することで、生徒一人一人の考えがお互いに分かるようにする。また、教室全体の机の配置をV字型にすることで、生徒同士の意見交換が活発に行えるようにする。

(2) 学習指導案

① 主題名 「決まりの大切さ」

② ねらい 元さんが辞職するまでの心の動きを考えることで、決まりを守ることの大切さを理解し、よりよい生活をしようとする道徳的判断力を育てる。

③ 資料名 「二通の手紙」（出典「私たちの道徳」（文部科学省））

④ 資料の概要

勤勉な動物園の職員元さんは、ある日規則を破って幼い姉弟を入園させてしまう。閉園時刻を過ぎては戻らず、一斉捜索の末姉弟は無事見つかる。数日後元さんはその母親からお礼の手紙を受け取る。その後園から停職処分を言い渡されたが、元さんは自らの責任を取って辞職した。

⑤ 展開の概要

過程	生徒の学習活動（・）と主な発問（○） 基本 ◎中心発問	予想される生徒の反応 (期待される反応は〰)	時間	支援及び留意点
導入	・身近にある決まりについて発表する。 また、それを守れているか守れていないか自分の行動を振り返る。	・時間を守る。 ・自転車に乗るときはヘルメットをかぶる。	3分	・遵法精神に関わる身近な例に触れて本時で扱う価値について方向付けをする。
展	・「二通の手紙」の登場人物、あらすじ等を確認する。(前半部は読んである) ○元さんは2人の子どもを入園させたとき、どのようなことを考えていたのか。(発問1) ・続きの範読(2枚目17行目「電話のベルが鳴った」まで)を聞く。 ○連絡を待っているときに元さんはどのようなことを考えていたのか。(発問2) ・続きの範読(母親からの手紙の終わりまで)を聞く。 <u>伝え合う活動</u>	・毎日来てくれているのにかわいそうだからちよつとだけでも入れてあげたい ・少しぐらいの規則違反は問題ないだろう。 ・二人にもしものことがあったら。 ・自分のせいでこんなことになって、みんなに申し訳ない。 ・ <u>規則を破らなければよかった</u>	12分	・2つの規則を押さえ、今後の発問に活かせるようにする。 ・元さんの姉弟への優しさから起こした行動であることを押える。 ・規則を破っているという事実は確認する。 ・姉弟の心配、自分のしたことへの後悔、反省などのキーワードを押さえ、次の発問へつなげられるようにする。 (価値理解)
	○母親からの手紙を読んで元さんは自分のしたことをどう思っているのだろう。(発問3) 個人→周囲との意見交換→全体シェア→周囲との意見交換 <伝え合いの姿> 全体での意見交流を行うことで元さんの思いをより深く考えるようになり、さらに周りと相談して自分たちの考えを深めようとしている。	・良い。規則は破ったけれど子どもたちもお母さんも喜んでくれたから ・良くない。2人は喜んでいようだけれど、 <u>危険な思いをさせてしまったのだから</u> ・どちらも言えない。規則を破り、周囲に迷惑をかけたけれど、子どもたちの願いを叶えてあげられたから。	15分	・自分の判断に対する元さんの思いを「良い」から「良くない」の5段階の数直線に表し、その理由とともに話し合わせる。机の上に意思表示のプレートを提示することで、生徒一人一人の考えが分かるようにする。 また机の配置をV字型にすることで、生徒同士の意見交換が活発に行えるようにする。 (他者理解、人間理解)
開	・続きの範読(3枚目最後まで)を聞く。 ◎元さんはどうして自ら職を辞したのだろうか。(発問4)	・ <u>二人に危険な思いをさせてしまう可能性があったから</u> ・自分の無責任な判断で事故が起きていたかと思うと、罪の重さは停職処分以上だと感じた。	15分	・元さんは、事の重大さを感じていることを押さえる。 ・動物園という、大事故につながる可能性のある場所での出来事ということをもふまえて考えさせたい。 (他者理解・人間理解)
	・今後の生活も考えながら、学んだことを書く。	・ <u>みんなが気持ちよく生活するためにルールを守ることが大切だと分かった</u>	5分	自分の今後の生活と絡めて考えさせる。(自己理解)

(3) 授業記録

【発問3より】
T:「母親からの手紙を読んで、元さんは自分のしたことをどう思っているのでしょうか。」
T:「ワークシートの数直線に、良い、良くない、どちらもいえないを5段階で表し、その理由を書いてみましょう。自分の考えが5段階のどこなのか、三角コーンにも記入して、周りの友だちからもわかるようにしましょう。」
S:(生徒記入8分)
T:「では皆さんの考えを聞いてみます。+2の人?・・・(生徒の立場を確認)」
S:(生徒挙手) 良い(+2) 0人、(+1) 9人、(0) 19人、(-1) 3人、良くない(-2) 1人
T:「では、どんな考えか聞いてみましょう。-2のAくん。」
S(A):「今回は無事に見つかったからよかったけど、最悪の事態になったら責任がとれないから。」
T:「今のAくんの意見を聞いてどう思いますか。周りの人と話してみてください。」
S:(近くの席の人と意見交換)
T:「Bくん、どう思いますか。」
S(B):「最悪の事態になってしまったら-2なんかではすまなくなってしまう。」
T:「Bくんは0ですが、どうしてですか。」
S(B):「動物園の周りの人に迷惑をかけてしまったのは良くないけど、子どもの夢を叶えてあげたいという気持ちは良いと思うのでどちらも言えないので0です。」
T:「Bくんの意見を聞いて皆さんはどう思いますか。周りの人と話してみてください。」
S:(近くの席の人と意見交換)
T:「Cさんは、どう思いましたか。」
S(C):「皆に迷惑をかけてしまったのは良くないと思うけど、子どもたちのためならいいのじゃないかなと思います。」
(この後数名の生徒の考えを聞き、続きの範読を行う)
【発問4より】
T:「元さんは停職ではなく、どうして自ら職を辞したのだろうか。考えてみましょう。」
S:(個人でワークシートに記入6分)
T:「では、皆さんの考えを教えてください。」
S(D):「自分のしたことの重大さがわかったから。」
T:「同じような考えの人。」 → 数名の生徒が挙手
S(E):「もうこんなことが起きてはいけないと、周りに伝えるために。」
T:「同じような考えの人。」 → 数名の生徒が挙手
S(F):「最悪の事態になる可能性があったので、自分への罰が停職処分では足りないと思ったから。」
T:「同じような考えの人。」
→ 数名の生徒が挙手
(この後、本時の学習の感想を書く。)



(4) 考察

授業後、生徒のワークシートの感想欄をもとにして、本時のねらいを達成できたのか検証を行った。生徒の感想には、「いろいろな事情があるけれど、皆で生活しているのだから、きまりを守ることは大切だと思った。」「自分一人の行動で周りに迷惑をかけてしまうことになるので、やはりきまりは守ったほうがよいと思う。」といった、ねらいとする価値についての理解の深まりが見られる記述が多く、本時のねらいはおおむね達成できた。これをもとに、授業研究会では、本時の「発問」と「伝え合う活動」の2点について議論した。

① 「発問」について

発問が中心発問を含めて4つと多くなってしまったが、元さんの心の動きや葛藤を考える上では必要な発問であった。発問3で、母親からの手紙を読んで元さんが自分のしたことをどう思っているかを考え、伝え合ったことで、元さんの思いをより深く考えることができていた。このことが、中心発問「元さんはどうして自ら職を辞したのだろうか」につながり、ねらいとする価値について、生徒はより深く考えることができた。

② 「伝え合う活動」について

発問3において、自分の判断に対する元さんの思いを、5段階の数直線に表しその理由も考えることで、どちらか一方の理由だけでなく、元さんの複雑な心の内を考えることができた。

机の配置をV字型にすることで、生徒同士が顔を見て伝え合う活動が行える場づくりができ、少人数での率直な意見交換を行うことができた。近くの人との少人数での話し合いという点では有効であったが、全体の場での生徒同士の意見交換はあまり行うことができなかった。お互いの顔が見やすいというV字型配置の利点や、三角コーンを用いた意思表示のよさを活かせるように、生徒同士の語り合いの場が作れるようになるとさらに深まりのある活動になる。そのためにも、教師が授業のコーディネーターとなり、生徒の発言を全体に広げられるような指導技術を磨いていく必要がある。

○研究の概要（県立渋川青翠高等学校の取組）

1 本校における道徳研究の在り方と研究課題の設定

- 校訓「礼・誠・明」は、道徳的には「公共の精神を養うとともに、社会性の育成を図り、より良い人間関係を築こうとする力の育成」を目的としたものである。
- より良い社会を実現するため、社会性や道徳心の育成、マナー向上などの道徳教育を効果的（意図的、計画的）に実施できる最終教育機関として、「信頼される社会人として活躍する力（「礼・誠・明」）の育成」を学校教育活動の目標とした。
- 本校は総合学科高校のため選択科目が多く、クラス単位での授業が少ない。そこで、クラスの団結力を高めるため、特別活動を重視した実践研究を行うこととした。

2 体系的・組織的な道徳教育の推進

- 「道徳教育実践推進委員会」を組織し道徳教育の実践研究の推進母体とした。また、先進校を視察し本校との比較や取り入れるべき内容について検討した。
- 「道徳教育全体計画」の活性化のための見直しと職員の共通理解を図るための職員研修を複数回実施した。特に、道徳教育について職員の理解を深めるため、専門の外部講師（大学教授）を招き、本校の道徳教育推進についてもご指導いただいた。
- 全校生徒を対象に、中学校の特別の教科「道徳」から22項目のアンケート調査を実施し、生徒の道徳的意識の実態を把握し、意識が低い項目の改善に努めた。
- 特別活動については、生徒の実態調査にもとづいて各種行事における道徳的目標を設定し、生徒会活動とホームルームとの連携を強化して実施するよう配慮した。

3 特別活動、家庭や地域との連携における取組

- 一日体験学習会や学校紹介、各種の地域イベントなど、多くの学校行事において生徒会や部活動の生徒を中心として、主体的に活動させることに留意した。
- マラソン大会や文化祭などの学校行事に際し、道徳的な目標を持たせて臨むことが「信頼される社会人」への成長に結びつくことを意識させるよう配慮した。
- 渋川広域圏の小学校、中学校、高等学校の代表による「いじめ防止フォーラム」を主催し、生徒会を中心とした企画、準備、運営によりフォーラムを開催した。
- 県の研究指定による「私たちのスマホ利用ルール作り」において、生徒会を中心に全校生徒のスマホ利用実態調査を行い、その結果を生徒へフィードバックしながら、外部講師の講話やワークショップを開催し、合理的な4つのルールを策定した。
- 生徒アンケートで道徳的意識が低かった「向上心や克己」「強い意志」について考える機会として、外部講師（ザスパクサツ群馬監督：服部浩紀氏）による講演会を開催した。

4 公開研究授業の実施

- 全校生徒を対象としたアンケート調査により、本校生徒の道徳的意識が低い3つの項目について、学校行事により改善を図る試みを公開授業のテーマとした。
- 文化祭という大きな学校行事の実施にあたり、全校生徒一人ひとりに自分の意識が低いと考える1項目を選択させ、道徳的目標を立て意識的に取り組むよう促した。
- 文化祭終了後、生徒各自の道徳的目標への取組についてアンケート調査した。
- 「信頼される社会人になるために」というテーマのもと、文化祭での各自の道徳的活動を他の生徒と検証し、体験や考えを共有するHR活動を公開した。

5 研究の成果

- 職員は、校内研修や講演会、学校行事の道徳的取組をとおして、高等学校教育における道徳教育の在り方を学び、教科指導を含めたあらゆる場面において道徳教育を推進する意識が向上した。
- 生徒は、日常生活や学校生活のあらゆる取組において道徳的目標を設定することで、自己の自立心や向上心、社会性が高まることを体験し、「信頼される社会人として活躍する力」の重要性を意識することができた。

6 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

- 講師を招いての基礎研修と日々の授業実践、授業研究会の積み重ねにより、教師の授業構想力、伝え合う活動の工夫等の質的な向上が見られた。その結果、生徒が道徳の授業に主体的、意欲的に取り組む姿が見られた。
- 「伝え合う活動」を道徳だけでなく、教科の指導においても積極的に取り入れることで、生徒の発言への抵抗感が減り、自分の思いを少しずつ他人に伝えられる場面が増えてきている。同時に生徒の道徳的価値への関心の高まりも感じられ、学校全体に落ち着きが増してきた。
- 保護者に本校の道徳教育の取組に関する情報を積極的に伝えたり、実際に授業を参観してもらったりすることにより、保護者の道徳教育への関心と期待の高まりが見られ、授業や使った資料などについて家庭でも話題となる機会が増えた。さらに親子のコミュニケーションや、学校と家庭の信頼関係をより一層深めることにもつながっている。

(2) 今後の課題

- 道徳教育を学校教育活動全体で行っていくために、道徳教育全体計画を整備し、それに基づいた取組を推進していく。また、全体計画に基づき、実態に合った道徳の年間指導計画や全体計画の別業に沿った授業を行っていく。特に、重点項目に掲げた内容については行事や時期などに関連付けて、複数回道徳の授業を行うことでより一層豊かな心を育てていきたい。
- 資料を効果的に活用し心に響く道徳の授業を展開するために、研究授業を積み重ね、教師一人一人のさらなる授業力の向上に結び付ける。また、話し合いのルールを考えたり、話し合いの形態や方法を工夫したり、話し合うための教材を活用したりして「伝え合う活動」が生徒同士で価値を追求するための場となるよう研究を続ける。
- 道徳教育啓発リーフレットの配布に伴い、保護者の理解を深めるとともに、定期的なアンケート調査を基に成果を共有しながら、課題を明確にしてさらなる教育活動の展開を目指す。

7 参照できるホームページ

<http://www.nc.t-minami-jhs.gsn.ed.jp/> （富岡市立南中学校）